# 一人の卒業式

原　幹子

卒業式のシーズンになると思い出すのが、A君である。

当時、私は新潟の山奥の豪農地帯の高校で養護教諭として勤務していた。今から三十年前である。高校の民主化闘争、自由化闘争が盛んに起り、この高校も制服は廃止され、服装は自由化された。女子生徒のミニスカートが流行した。男子生徒にとっては刺激的だったのか、

「先生、あのミニどうかならないかな？　椅子に座わると太ももまる見え、気になって勉強が身に入らないよ」と訴える。

学校の風紀はみだれ、飲酒・喫煙そして、異性交遊は目にあまるものがあった。暴走族とまではいかないが、バイクの深夜徘徊で補導される生徒も多かった。

「この学校は勉強の指導より、生徒指導にエネルギーが費やされる」となげく。そんな雰囲気での学校での出来事である。

身長一七〇センチ、体重七〇キログラム、大きな身体で教室での存在感はある意味では大きかった。しかし、彼は家に帰るとほとんど、単独行動である。教室では居眠り。眠っていない時は授業妨害。教科の先生は、そのため、居眠りを黙認しているのだ。彼の居眠りは、バイクの深夜徘徊のため。彼が警察に補導された時も、夜中の二時、バイクを乗りまわしていたためである。何回も指導を受けても、一向なおらない。一層退学処分にすればと考えるだろうが、一ヵ月後に卒業を控えているため出来ず、苦肉の策として学校謹慎となる。家庭謹慎を受けても、もはや、家庭では彼を指導出来ないと判断したからである。もちろん、生活指導からの提案で職員会議で決まった。一ヵ月の学校謹慎で卒業式は出席出来ずというものであった。

枯れ葉教室の三分の一ほどの生活指導室で朝八時半から、午後の四時まで勉強である。他の生徒との接触も禁止された。課題が一時間ごとに出され、監督がついている。先生方もたいへんだったが、本人にとってつらい日々になりそうだった。指導室には上半身写し出される大きな鏡が置いてあった。

「毎日、自分の姿を見て、反省しろ」というある先生の気持ちらしい。彼は毎日登校した。

しかし十日目ぐらいである。

「先生、お腹が痛い。お手洗いに行ってきたんだ」と保健室に来室した。
「お腹が痛い？」
「朝から夕方まで、あんな狭い部屋にいるんだよ。トイレしか出てはいけないなんて、身体が悪くなっちゃうよ」
「あんた、えらいね」
「なんで」
「だって、今まで休まないもの」
「だって卒業したいもの」
「耐えているんだ」
「もう、苦しくて、苦しくてしょうがないけど」
「苦しくて、苦しくて」
「先生、わかるだろう。鏡とにらめっこ」
「鏡を見て、私はきれい、私はきれいと言えば、きれいになるんだって」
「女じゃあるまいし」
「いや、自分はいい男だなあー、女がよってくるのもあたりまえっていうのはどう？」
「先生って、面白いこと言うんだね」
「駄目？」
「そんなこと出来ないよ」
「自分が好きになるかも」
「そんなバカな。鏡を見ていると、嫌なところだけ目につくんだ。だから、出来るだけ見ないようにしているんだ」
「自分の嫌いなところが目につくのか」
「そうすると、一層死んでしまいたいと思うんだよ」
「死んでしまいたい？」
「俺、小学校五年から六年にかけて、病院に入院したことあるんだ」
「なんで？」
「白血症で。白血症って、白血病の一歩手前なんでしょう」
「え！　先生そう言った？」
「ううん」
「じゃ誰が？」

「俺がそう思っているんだ。だから、人が八十年生きる所、俺はその半分しか生きられないんだ。だから、今のうちになんでもやりたいんだ、飲酒、喫煙、セックス」
「ちょっとまった。白血症って、白血病じゃないんだよ。今、こんなに元気じゃない。たぶん蛋白に関係して皮膚疾患じゃないかと思うんだけど。先生も調べてみる」
「エ！　白血病じゃないんだ」
「今はどうなっているの？　病院にいっているの？」
「退院してから行っていない」
「じゃ違うよ」
「じゃ、俺白血病じゃないの」
「そうだと思う。A君、自分の人生は人より短いと思っていたんだ。だから禁止されていることを、今しかやれないと思ってやったのかな？」
「先生、わかる。俺の気持ち」
「わからないこともない」
「中学二年生の時、母親が亡くなったんだ。すると父も祖母もおまえのせいだって言うんだ」
「どうして？」
「看病疲れだって。毎日、毎日言われると面白くない。だから、夜バイクに乗りたくなるんだ。バイクはいいよ。なんでも忘れるもの」
「乗っている時はね。深夜徘徊にも理由があるんだ」
人間、寂しさやつらさがある程、それをまぎらわすためにいろんな行動が出る。それが、彼には反社会的な行動に出た。人はそれを人間が弱いからだ、甘えているからだと冷笑する。「強くなれ、甘えるな」と一喝する。しかし一向になおらない。それもそうだ、大人は自分の価値観で子供をしかる。自分の欲目で子供に接する。子供には子供の気持ちがあり、悪くても考えがある。子供達の気持ち、考えを理解してあげなければ。といって私にそれが出来るかと言えば自信ない。でも、わかろう、わかろうと努力している。そして、一生懸命言うことを聞いてあげることしか出来ない。自分の価値観は横において。
「あー、胸がすっきりした。今まで、誰にも言ってないんだ」
「そうか、自分の胸にしまっていたんだ。つらかったろうに」
「……」

「俺、帰るわ」と言って、保健室を出ていく。お腹の痛いことなど、どこ吹く風。それからのA男は二、三度、来室しては、自分の夢なども語る。彼が変ったのは明らかだった。

母親だけが自分の味方だった。その母を死なせたのは自分だとせめ、自責の念にさいなまれ、自分は人よりも早く死をむかえるのだと誤った恐怖感をいだきながら思春期をむかえた枯葉どんなだったろうと思うと、私は胸をしめつけられた。私の前に、たった一人でも良い、彼の心の叫びを聞いてくれる人がいたら、そして、彼に共感できる友がいたら、もっと安心出来たのにと思う。人と人との出会いの大切さを知った。

A男は一ヵ月の謹慎がとけ、無事、校長室でたった一人の卒業式を迎え、学校を去った。

「よく頑張ったね」と校長先生から声をかけられると、

「ありがとう、ございました」と深々と礼をした。また玄関を去る時、先生方に、

「頑張れよ」といわれると、彼の目に光るものがあった。卒業して一ヵ月も過ぎないのに、

「先生、就職が決まったよ、日本通運だ」

「よかったね、夢がかなえられる」

「夢って」

「ほら、トラックの運転手になって、そのトラックでアメリカ横断するっていう夢」

「あれは、大きすぎて駄目だ」

「いや、何年後には、彼女と子供をつれてきて」

「それも、まだまだ」と言って去った。彼の後姿を見て、私は幸福を感じていた。

学校では、縁の下の力持ち的存在の養護教諭教育はすぐには効果が出てこない。自分のやっていることは自己満足かと疑心暗鬼の連続である。保健室は甘いと批判される。

民主化闘争、自由化闘争のさなかに高校に封仕し、教育とはなんぞやと疑問を持ち、非組合員と管理職をないがしろにする組合に自分の理念・信念がゆらぎ、また人道的立場で、体調の悪い管理職と接すると「あいつは管理職側だ」と白い目でみられる。何時もあの頃は同僚との葛藤、生徒との葛藤。そして、カウンセリングとの出会いである。

人を理解すること。人を信じること。（だまされてもだまされても信じる。）心から人の話を聞くことを教えられたというか体得した。

でも難しい。時には、自分が偽善者ではないかと不安になる。いつしか、私は理解しようと思わなくなった。ただ、耳を傾け、わかろう、わかろうとする気持ちを大事にした。

A男との出会いは、自分を信じることが出来た出来事である。今は現場を離れているが卒業生や退学者から近況報告の手紙や、年賀状を見るのが楽しみのひとつである。自分を手こずらせた生徒が、子供をつれて買い物をしている姿や、夫婦仲よくしているのを見ると、つくづく教育の喜びはあとから出て来るものだと思った。